

令和元年五月読書会は荻窪・四面道交差点際の喫茶店“石橋亭”にて開催。少し気分が変わった雰囲気です。今回の本はいわゆる“音楽ミステリー小説。ミステリーですから、詳細の記述は控えさせていただきます、気づいた点をいくつか記載し感想文にさせていただきます。

名古屋の資産家の祖父、、、（二年前に脳梗塞で倒れ、会社業務は携帯一本で済ませさっさと車椅子生活に移った。頭と口が人一倍元気なお爺じいさん）、、、、と一緒に暮らす私は16歳の小女、従姉妹の片桐ルシアとともにピアノ練習に励む幸福な毎日を送っている。ある日突然火事で祖父と従姉妹はなくなる。私は全身大火傷したが奇跡的に生還しなんとか出歩けるようにまで回復する。

お爺さんの遺産は12億7千万円、相続手続きも終わったが、私は手足が不自由、大火傷の回復と松葉杖生活を送る。諸事情からどうしてもピアニストへの道をたどることになり、毎日リハビリを兼ねてピアノ練習に打ち込む。音大の講師で気鋭のピアニスト、（実は司法試験をトップ成績で取得した法曹界の有名人）に指導を受ける。母親はこの娘にどうしてもピアニストへに育てたい、父親も不良債権に悩む大手銀行の支店長代理、多忙の中でも母親同様娘に期待する。資産家の祖父の次男研三氏はまだ独身で、“夢に生きている”漫画家志望の男。残された家族全員が娘の回復を願う。

しかし不可解な事故が起こる。松葉杖の私を狙ってと思われる階段の細工、そして松葉杖への細工。さらに母親が近くの神社の階段から落ち死亡。事件が発生しいよいよ刑事が登場した。

これからはスリラー小説ですから省きます、413ページまで楽しく、これからはどうなるか？の期待感で一気に読んでしまいます。

この本の特徴は表題のドビッシー音楽だけでなくベートーベンからショパン・リスト・ブルクミュラーそしてドビッシーのピアノ演奏場面が描かれ、卓越した表現力といってもよいと思います。「音楽は音でなく文章でも聞こえるのか！」と思った程です。しかもいずれの音楽もどこかで聞いた音楽だけに一層響いてきます。

資産家の祖父は高度成長期からバブル崩壊まで生き抜いた経営者像そのものであること、長男は不良債権に悩む銀行員、夢に生きる漫画家志望の次男、音楽学校の教師と戦後社会を通じて生きている各層各世代の人物を登場させて、

- ・ インドネシアでの地震・津波の模様を描き、
- ・ ここ10年で増えた介護士。リハビリ。で現代の中高年問題に少し触れる、
- ・ 音楽学校等でのコンクールで名声を！ 現代のスポーツ根性にふれている
- ・ 学校で私をいじめる女生徒達の陰湿な言い方、現在の学校等で起こっている事象を描き
- ・ 音楽演奏家同士の軋轢、

の諸問題に触れている。

この本の解説（大森望氏記載）に“音楽+すぽ根+ミステリーのハイブリッド”と書かれている私はこれに“いじめ”と“人間は二面を併せ持つ”を加えたい。

以上